

令和2年1月2日

## 「沖縄愛楽園を訪れて」

ボランティアガイド 高谷和生

令和元年の年末を利用して沖縄県名護市の屋我地（やがち）島にあるハンセン病患者の回復者施設「沖縄愛楽園」を家族で訪れた。目的は沖縄戦に際し、入所者自らが不自由な手にツルハシを布で縛りつけて掘った戦争遺跡「早田壕」を見学することであった。

早田壕は昭和19年3月、当時の早田園長の指示で園内丘陵の各所に掘られた横穴式防空壕である。目指すその壕は、今も入所者が生活する第一センター廊下の奥にたたずんでいた。全国の軍や自治体施工壕（特殊地下壕）の調査・保存等に関わってきた立場からは、入所者のあまりにも悲痛な証言が詰まった壕ではあるが、思いのほか小さく、簡易な造りであることに驚いた。

沖縄10・10空襲では園建物の9割が破壊され、続く米軍「鉄の暴風雨」にも壕は耐え、被害者は一人に留まった。一方ではその後の一年間で、当時入所者の3割にあたる289人が亡くなったのは、長期にわたる壕生活での病状悪化や栄養失調・赤痢がその主な原因だった。

早田壕は沖縄戦で入所者の命を守り、そして平和が訪れたのちに命を奪った。このような悲惨な戦争を私たちは二度と起こしてはならない。

今年は「戦後75年」。ツルハシのあとが残る薄暗い壕の壁に触れながら、全国各地で起きたハンセン病差別の実相を学びつづけ、広がる紺碧の海が幾多の差別と戦争の惨劇を包み込むことを願い心に刻んだ一時だった。

